文部省著作

尋常小學讀本

七

合名會社國定教科書共同販賣所

K13
Mo

国立国語研究所
72426
図書館



尋常小學讀本

文部省著作

七

發賣所　合名會社國定教科書共同販賣所

もくろく。

第一　春の遊（シキ）。……一
第二　四季。……二
第三　なまけもの。……四
第四　三つのちょーちょ。……八
第五　茶。……十三
第六　日本の景色（けしき）。(一)……十五
第七　日本の景色（けしき）。(二)……十八
第八　公園（こーえん）。……二十四
第九　かはいさうな女の子。……二十八
第十　人ノカラダ。……三十一
第十一　煙草（たばこ）と酒（さけ）。……三十五
第十二　石と豆（まめ）。……三十八

第十三　鳥ノ巣。……四十三
第十四　停車場（てーしゃば）。……四十五
第十五　貿易（ぼーえき）。……五十
第十六　開港場（かいこーば）。……五十二
第十七　神戸（かうべ）からの電報（でんぽー）。……五十五
第十八　航海（こーかい）の話。(一)……六十一
第十九　航海（こーかい）の話。(二)……六十七
第二十　燈臺（とーだい）。……七十三
第二十一　琉球（りゅーきゅー）。……七十四
第二十二　寒暖計（かんだんけい）。……七十六
第二十三　小太郎の日記（にっき）。……八十二

桃　櫻

第一　春の遊。

お庭に、桃がさいてゐる。
お庭のさきで、
女の子どもがまりつきあそび。
まりをつく音、ぽん、ぽん、ぽん、ぽん。
かずをよむこゑ、ひー、ふー、みー」。

小山に、櫻がさいてゐる。
小山の上で、
男の子どもがついたいあそび。

らっぱふく音、とて、ちて、たー。
かけるごーれい、一、二、三。」

野原に、すみれがさいてゐる。

野原の中で、

みんなが、いっしょに、おにごとあそび。
おにをきめるよ。「じゃん、げん、ぽん。」
せなかたたくよ。とん、とん、とん。」

第二　四季（シキ）。

日、カサナリテ、月トナリ、月、カサナリテ、年トナ

ル。一年ハ十二箇(カ)月ナリ。一年ヲ、春、夏、秋(アキ)、冬、ノ四(シ)
季(キ)ニ、分ツ。
三月ノハジメヨリ五月ノヲハリマデヲ春ト
イヒ、六月ノハジメヨリ八月ノヲハリマデヲ
夏トイフ。九月ノハジメヨリ十一月ノヲハリ
マデヲ秋トイヒ、十二月ノハジメヨリ二月ノヲハリ
年ノ二月ノヲハリマデヲ冬トイフ。
春ハ、暖ニシテ、花サキ、夏ハ、暑クシテ、草木シ
ゲル。秋ハ、涼シクシテ、稻ミノリ、冬ハ、寒クシテ、

君

雪フル。

カクテ、冬、ヲハレバ、マタ、春トナル。春ハ、四季ノ

ウチ、モットモ、タノシトキナリ。

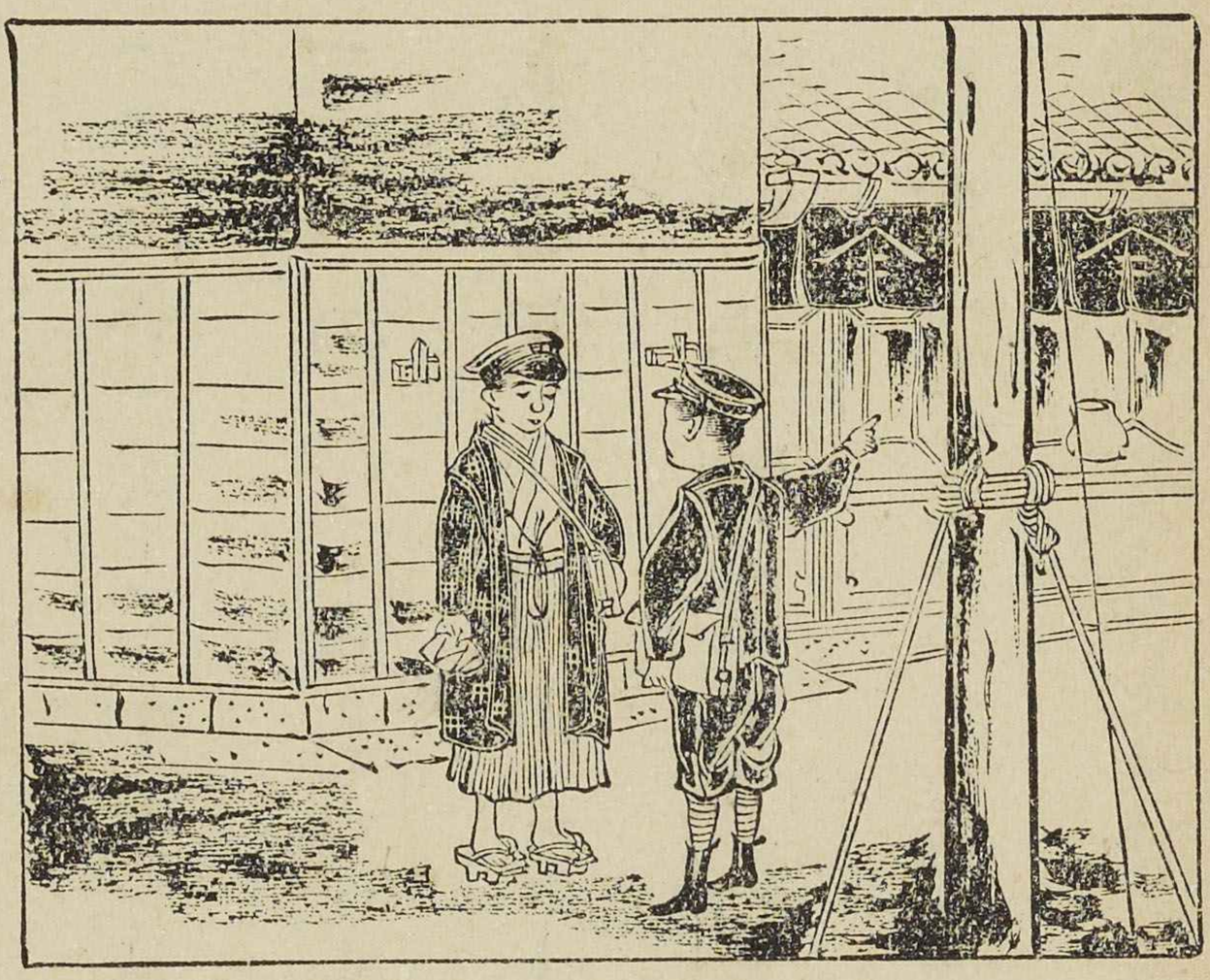
第三　なまけもの。

二人（ふたり）の子どもが、通の四つかどで、であった。それは、學校へ、行く通と、野原へ、行く通との四つか

どであった。

秋山「春野君。おはやう」。

春野「秋山君。おはやう」。



秋山「君。どこへ、行くのか」。

春野「學校へ、行くのだ」。

秋山「學校へ、行くのか。あの、おもしろくない學校へ、行くのか。來たまへ。野原へ、行かう。野原には、ちょーちょがさいてゐれやたんぽぽがさいてゐるよ。來たまへ。いっしょに、行かう」。

立戸

春野「學校がひけてからなら、いっしょに行かう」。

秋山「君は、どうしても、學校へ、行くのか。それでは、行きたまへ。ぼくは、野原へ、行くから」。

こんなことがあってから、もう、二十年ほど、たった。二人（ふたり）の子どもは、もう、おとなになった。

ある、寒い日のことであった、顔色（かほいろ）のわるい、きたない着物を着た男が、りっぱな家の戸口に、立ってゐた。そして、しきりに、「どうぞ、お助けください。寒くてなりません。ひもじくてなりません。ど

うぞ、お助けくださ
い」。といってゐた。
すると、うちから、顔色のよい、きれい
きた主人が出て來た。そして、たいそ
さうな顔をして、穴
見た。
主人「君は、秋山君では
男「さよーでございます。秋山でござ
主人「やー。秋山君でし
はいりたまへ」。

ふたりは、うちに、はいった。男は、まだ、主人がたれであるか知らなかった。みなさんは知ってゐますか。

第四　三つのちょーちょ。

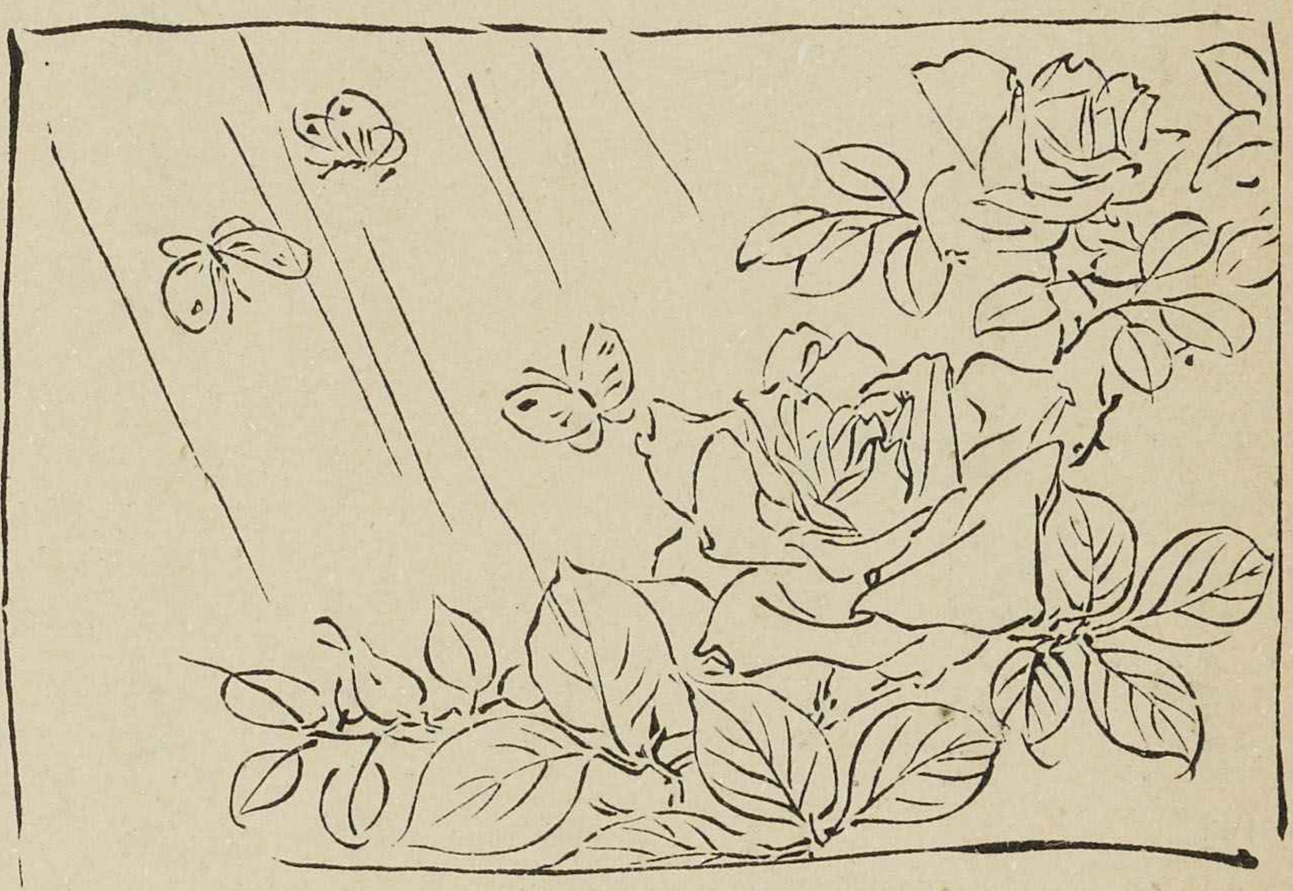
赤、白、きいろの三つのちょーちょがありました。ある、暖い日に、野原で、おもしろく、遊んでゐました。花から花へ、ひらひらと、まってゐました。ところへ、にはかに、雨がふってきました。ちょーちょは、うろたへて、うちに、歸りました。歸りました

が、戸がしまってゐました。かぎもみんでした。羽は、だんだん、ぬれてきちょーちょは、こまって、赤いばらのうました。そして、いひました。

「もし。ばらさん。しばらく、お宿をたづねさい。この雨で、こまってゐます。」

赤いばらはいひました。

「白いかたと、きいろいかたとには、かされません。しかし、赤いかたはわたくし



しかたがありません。
ですから、かしてあげませう」。
「いえ。いえ。弟をぬれさせてしまいました。
おいて、どうして、わたくしばかり、らくができませう。
雨は、だんだん、ひどくなってきました。ちょーちょはいひまし

貸

は、また、つれだって、白いばらのうちをたづねました。そして、いひました。

「もし。ばらさん。しばらく、お宿を貸してくださいまってゐます」。

この雨で、こまってゐました。

白いばらはいひました。

「赤いかたと、きいろいかたとには、貸されません。しかし、白いかたはわたくしと同じ色ですから、貸してあげませう」。

白いちょーちょはいひました。

「いえ。いえ。にいさんや弟をぬれさせてお
て、どうして、わたくしばかり、らくができま
せう。ぬれさせるくらゐなら、いっしょに、ぬれ
ます。」

かう、いって、また、とんで行きました。

お日様は、これをお聞きになって、「さて。さて。か
んしんなきょーだいだ。なかのよいきょーだいだ。」
とおっしゃって、にはかに、雨をはらしてくだ
ました。そして、もとのよーに、よい天氣にし

だ さ い ま し た。

ち ょ ー ち ょ は、喜 ん で、お も し ろ く、遊 び ま し た。

か ら 花 へ、ひ ら ひ ら と、ま ひ ま し た。

第五　茶。

茶 ハ、茶 ノ 木 ノ 葉 ヨ ル 國 ニ 成 長 シ、製（セイ）ス。茶 ノ 木 ハ、多 ク、暖 ナ 年 中、青 ク、秋 ニ ナ リ テ、白 キ 花 ヲ ヒ ラ ク。

茶 ヨ リ、製（セイ）ス。葉 ハ、高 サ 五 六 尺 ニ モ スギ ズ。

茶 ヲ 製（セイ）ス ル ニ ハ、五 月 ゴ ロ、新（シン）芽（メ）ヲ ツ ミ ト リ テ、セ イ ロ ー ト イ フ モ ノ ニ テ、ム シ、次 ニ、ホ イ ロ ト

イフモノニカケテ、モミナガラ、カワカスナリ。カクテ、ソノ葉ノ、ジューブン、カワキタルトキ、取リ出シテ、カメ、タハ、カンニ入レ、空氣（クーキ）ヲヨハヌヨーニシテ、タクヘオク。コレ、ワレラガ用ル茶ナリ。

茶ハ、ヨキホドニ、用フレバ、氣ヲハラシ、ツカレ



ヲナホスモノニテ、ワレラガ、シゴト ニ、ツカレタル時ナドニハ、用ヒテ、コーノーア ルモノナリ。

第六　日本の景色（しき）。（一）

おはなの母が、おくのまで、縫物をしてゐましたら、おはなは、お茶を出して、「おかあさん。お茶をおあがりなさいまませ」。といひました。母は、「ありがたう」。といって、飲みました。そして、「もう、縫物もすみましたから、何か、お話をしてあげませう」。

といひました。おはなは、きのふ、父に買ってもらった本をもって來て、「おかあさん。それでは、この本の名のお話をしてください」といひました。

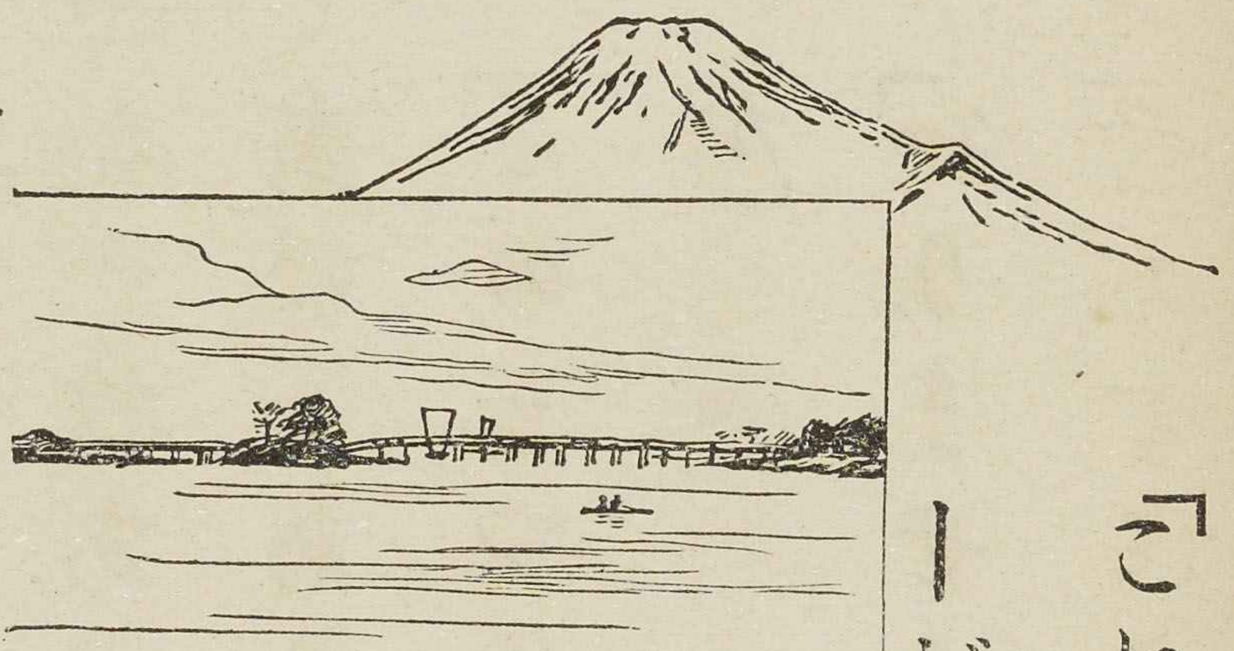
「おまへはこの山の名を知ってゐますか」。

「それは富士山です。讀本で、讀んだことがあります。」

「それでは、この橋の名は」。

「それは知りません」。

所



「これは瀬田の唐橋です。昔、たはらといふ人がむかでをいたといふお話のある橋です。橋のむかふに、帆掛船が通つてゐるでせう。あれが、琵琶湖といつて、日本で、いちばん、大きな湖です。景色のよい所がありまする。

「おかあさん。琵琶湖といふのは、どこに、あり

ますか。」

「近江の國に、あ

第七　日本

母が、一枚、あけると、こんどは、魚が、一

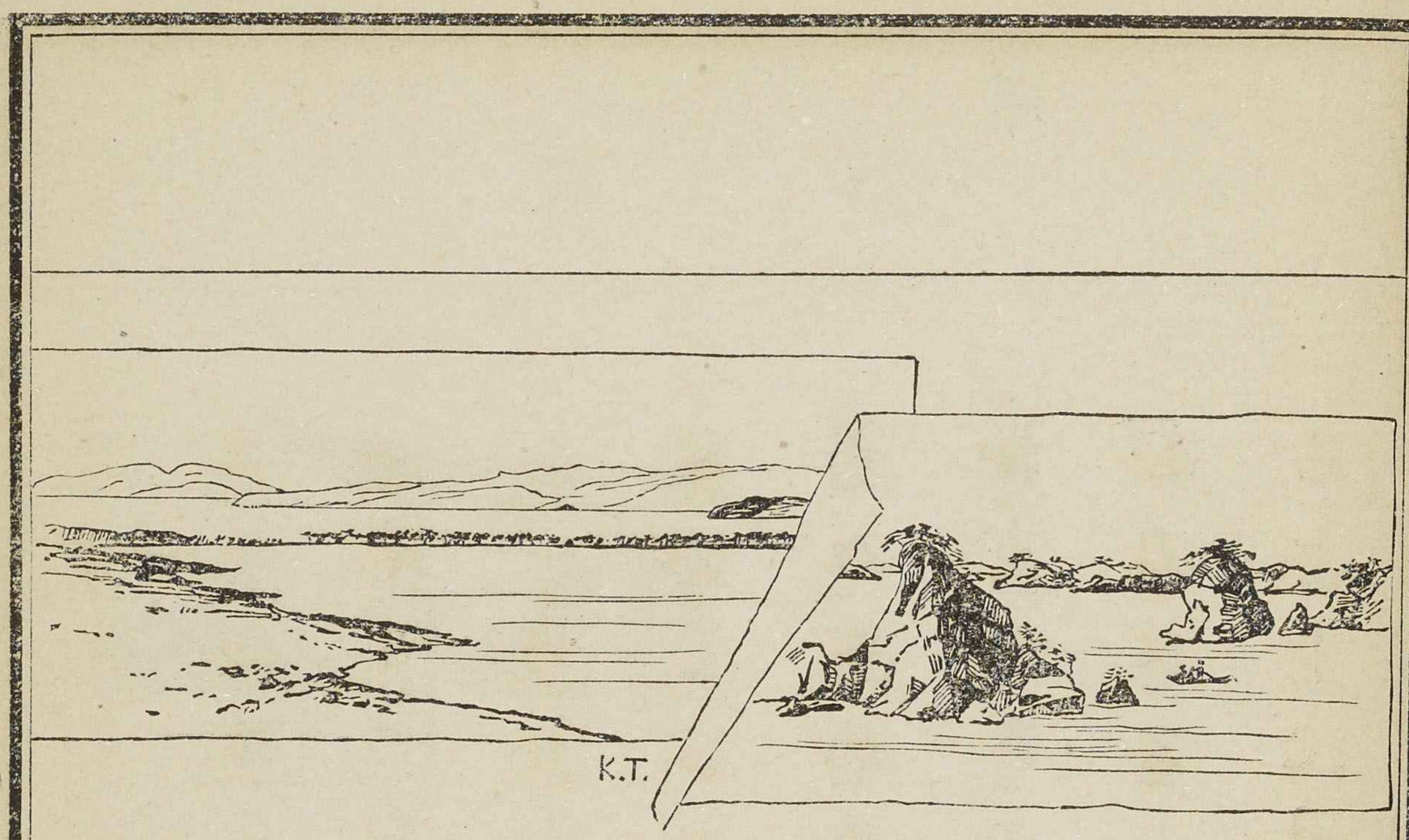
て、書いてありま

「この、三つの魚は、どこの魚だか、

か。」

「知りません。」

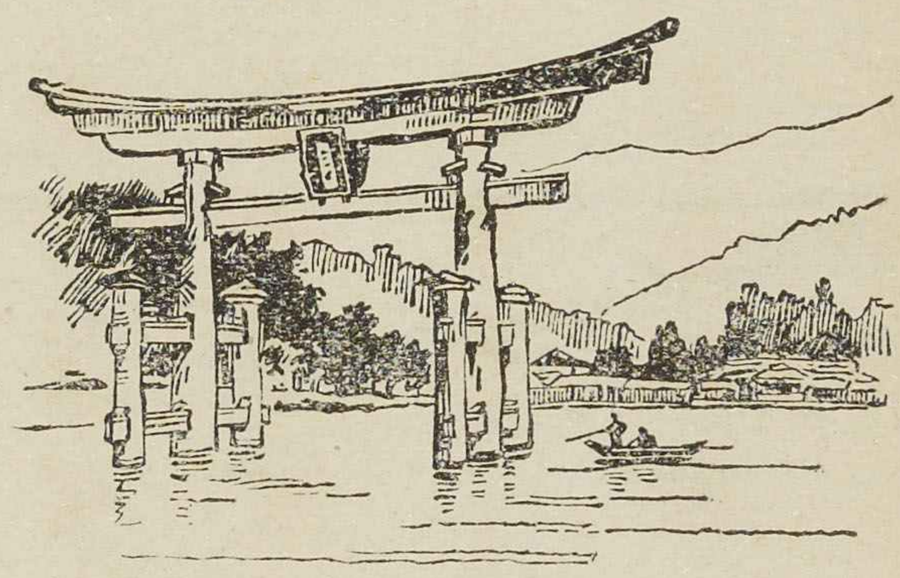
「右の方にあるのは松島の魚です。松島は、陸



白のまん前の國の入海に、あります。枝ぶりのよい松のはえた島が、何百といふほど、ちらばってゐて、たいそー、みごとだといふことです。

天の橋立は、丹後の國の入海に、あります。松のはえた、つき出て白い砂地が、海の中に、つき出て

岸



ゐて、遠方から、見るとまるで、海に、橋をかけたよーだといふことです。

左の方にあるのは嚴島の魚です。嚴島は、宮島ともいって、安藝の國の、西南の海に、あります。嚴島神社といふお宮が、その島の、北部の岸に、あります。しほがみちると、お宮のろーかが、海にういてゐるよーに見えて、ちょーど、お話にあるりゅーぐ

一のよーだといふことです。

この松島と天の橋立と嚴島とを日本の三景といひます。」

「おかあさん。日本には、もう、景色のよい所はありませんか。」

「ありますとも。海では、瀬戸内海、山の中では、日光など、もよい所です。とりわけ、日光は、湖があったり、瀧があったりして、景色のよい所です。そのうへ、東照宮といって、日本で、いちばん、

りっぱなお宮もあります。それですから、人が『日光を見んうちは、けっこーといふな。』といってゐます。

日本には、まだ、たくさん、よい所があります。

西洋人が、『日本は世界の公園だ。』といって、ほめるのもむりはありません。」

母は、かう、話をして、次の歌をもをしへてやりました。

日本の國は海の國。

大島、小島、その中を
通ふ白帆（しらほ）のおもしろや。
岬（みさき）、入海、そのふちに、
ならぶ松の木おもしろや。」
日本の國は山の國。
大瀧（おほたき）、小川、谷あひに、
お寺、お社、木のあひに
見えて、かくれて、おもしろや。」

第八　公園。

公園とは、いろいろの草木を植ゑなどして、人をして、じゆーに、遊びたのしましむる所をいふ。わが國の都會には、たいてい、公園あり。そのうち、東京の上野公園、淺草公園、日比谷公園、もっとも、名高し。そのほか、水戸の公園、金澤の公園、岡山の公園なども、また、名高し。おつるの住める町にも、公園ありこの入口なり。おつるとおふみとは、今、立札の前



にて、話しをれり。これ、立札に、「草木を折り取るべからず。」と書きてあれば、そのわけについて、話しをれるなり。

こいの公園の中には、松、杉、梅、櫻などを植ゑてあり。また、つきやまのつつじの花は、今、盛りたれども、つぼみより、中に、入りて、たのしく、まもきづきてあり。梅と櫻とは、すでに、若葉となれば、二人は、これ

おもしろく、遊ぶなるべし。

あしたは、にちよーびでございますから、お晝から、こーえんに、まゐりたいとぞんじます。あなたもいらっしゃいませんか。このまへ、あなたとごいっしょに、まゐりましたときには、櫻が、きれいに、さいてをりましたが、このごろは、つつじが盛ださうでございま

すから、それを見たいと思ふのでございます。どうぞ、おへんじをくださいませ。

五月十三日　つる

おふみ様

おさそひくださいまして、まことに、ありがたうございます。わたくしも行って見たいと思ってをりましたところでございます。

泣

母にききましたら、行ってもよいと申しましたから、おともをいたします。

五月十三日

おつる様

ふみ

第九　かはいさうな女の子。

おつるとおふみとが、公園から、歸って來ますと、女の子が泣いてゐまし

おつる「あなた。なぜ、泣いてゐますか。どうしたのですか。」

女の子「ありがたうございます。わたくしが、今、この通りますと、子どもが来て、わたくしの杖を取ってしまひました。わたくしは目が見えません。さがしても、わかりません。」

二人（ふたり）が、よく、見ますと、いかにも、めくらの子でした。

おふみ「まー。なんといふ、わるい、子どもでせう。」

女の子「こんなことは、たびたび、ございます。私は、目が見えんのが、かなしうございます。私は、學校に、行って、字を讀むこともできません。花がさいても、見ることもできません。」

二人（ふたり）は、たいそー、かはいさうに、思ひました。また、じぶんたちが、まんぞくなからだをもってゐて、學校に行ったり、公園（こーえん）に行って、遊んだりすることができるのを、しあはせに、思ひました。二人（ふたり）は、杖をさがしてやって、うちまで、おくりとどけ

てやりました。この子の父や母は、たいそー、喜んで、いろいろ、お礼をいひました。

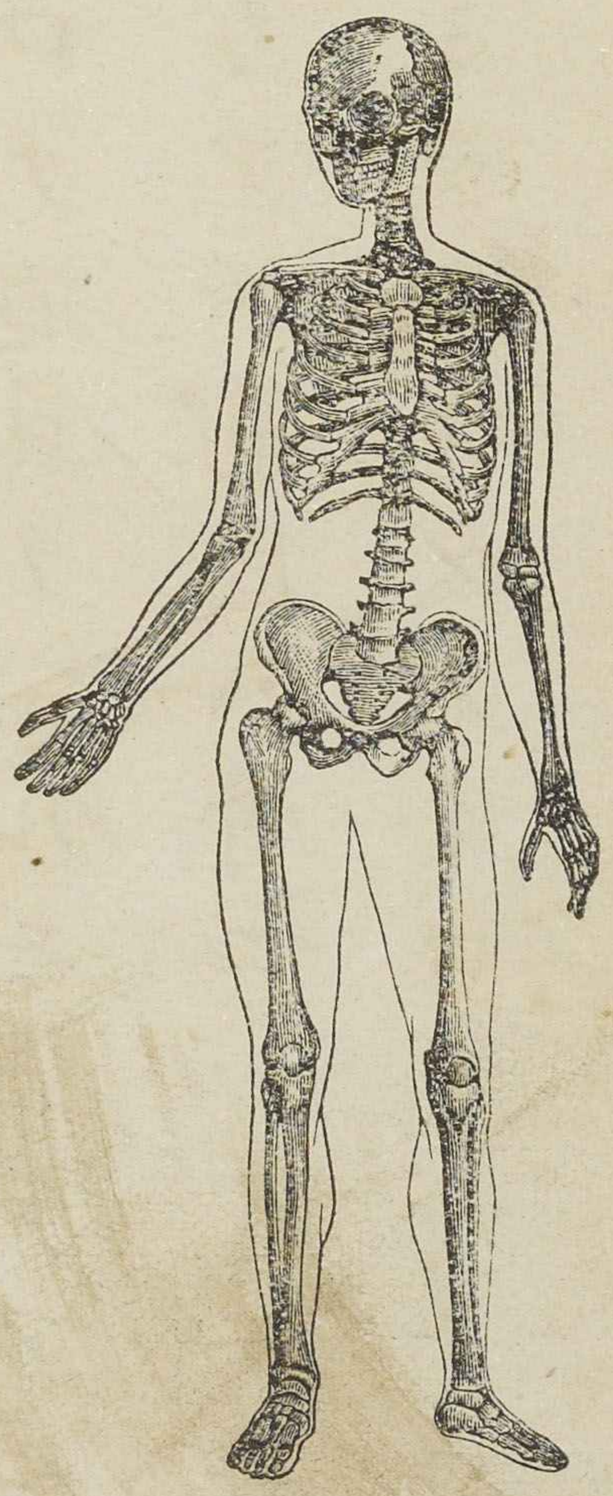
第十　人ノカラダ。

人ノカラダノソトヲ包ンデヰルモノハ皮（カハ）デアル。皮ハ、チョード、家チニアル、イロイロナ道具（ドーグ）ヲ守ルモノデアル。筋肉（キンニク）ハ骨（ホネ）ニツイテヰル。筋肉（キンニク）ノ下ニハ、筋（キン）肉（ニク）ガアツテ、カラダノ、イロイロナウ

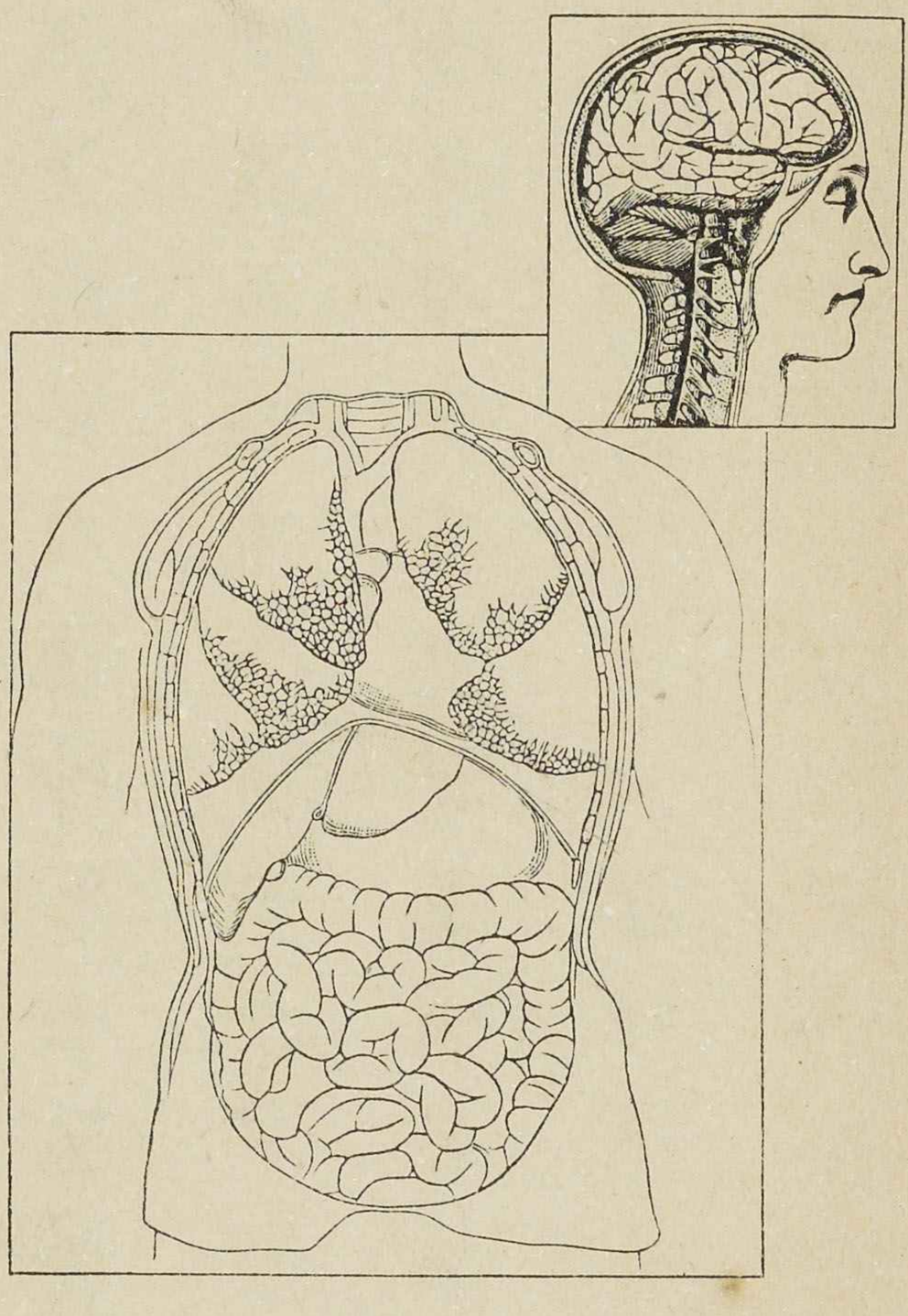
骨

内

カラダノ胴(ドー)ノシンニハ、脊骨(セボネ)ガトホッテヰル。マタ、手ト足トノシンニモ、ソレゾレ、骨ガトホッテヰル。骨ハ、家ノ柱ガ家ノカタチヲタモツヨーニ、カラダノカタチヲタモツモノデアル。



カラダノ内ニハ、三ツノヘヤガアル。第一ノヘヤハ頭(アタマ)デ、中ニハ、脳髓(ノーズイ)トイフモノガハイッテヰ



デアルカラ、頭蓋骨トイフ骨ガ、ヘヤノカベニナッテヰテ、ダイジニ、ソレヲ守ッテヰル。

第二ノヘヤハ胸デ、胸ノ内ノ右ト左トニハ、肺臓ガハイッテヰル。肺臓ハ、口

ル。腦髄ハモノヲオボエタリ、モノワケヲカンガヘタリスルモノデアル。コレハ、ヨホドダイジナモノ

ヤ鼻(ハナ)カラ、スヒ入レタ空氣デ、血(チ)ヲ、カラダジュ
心臟(シンゾー)ハ、肺臟(ハイゾー)カラ、キレイナ血ヲ、カラダジュ
ホド、ダイジナモノデアルカラ、ヘ
タクサンノ、肋骨(ロッコツ)ノ心臟(シンゾー)ト肺臟(ハイゾー)ハ、マタ、ヨ
第三ノヘヤハ腹(ハラ)デ、マク一枚デ、胸(ムネ)ト、シキッテア
ル。腹(ハラ)ノ中ニハ、胃(イ)ガハイッテヰテ、ソノ下ニハ、腸(チョー)
トイフ、長イモノガ、マガッテ、カサナリアッテ、ハイッ
テヰル。胃(イ)ハ、ロデ、タベタモノヲコナシテ、腸(チョー)ニ、

オヲ、胃(イ)ヲクル。腸(チョー)ハ、胃(イ)デ、コナレタモノトマゼテ、ソレカラ、養ニナルモノヘンヲメグッテ血ニナシ、コレヲクル。

人ノカラダハ、マヅ、コンナシカケデアル。コレハ、養ニナルモノヲ取ッテ、ソレヲ、ジョーブニスルニ、トト、運動スルコトガ、イチバン、ダイジデアル。

第十一　煙草(たばこ)と酒(さけ)。

聲問酒

ある日曜日、次郎が、父につれられて、町を通りたるに、顔の赤き人、大聲に、歌を歌ひ、右へ、左へ、よろめきながら、そばをすぎたり。次郎は父の袂をひきて、

「おとうさん。今の人はきちがひでせうか」。

と問ひたり。

父は、

「いーえ。きちがひではありません。酒を飲んだのです。酒には、あるこーると云つて、人を乱

はせるものがはいってゐますから、よけいに、飲むと、今のよーになります。また、だも弱くなります。」

とこたへたり。

かくて、一町ばかり、行きたるに、交番所の前にて、ひとりの子どもも、巡査に、しかられゐたり。

次郎は、また、父の袂をひきて、

「あの人は、なぜ、しかられてゐるのでせうか。」

と問ひたり。

答

父は、

『煙草(たばこ)をすったからしかられてゐるのです。煙草には、どくなものがはいってゐるくなります。とふと、からだがわるくなります。とのわかいものには、たいそう、がいすから、』はたちまへのものはすってはならん。』

と、法律(ほうりつ)で、とめてあるのです。」

と答へたり。

第十二　石と豆(まめ)。

畑のすみに、一つの石と一つぶの豆とがならんでゐた。

豆は、小さな聲で、

「どれ。これから、そだつよーいをしよう」。

といった。石は、ふしぎに思って、

「そだつとは、いったい、なんのことだ。」

といった。

豆は、

「おや。君は、まだ、そだつといふことを知らん

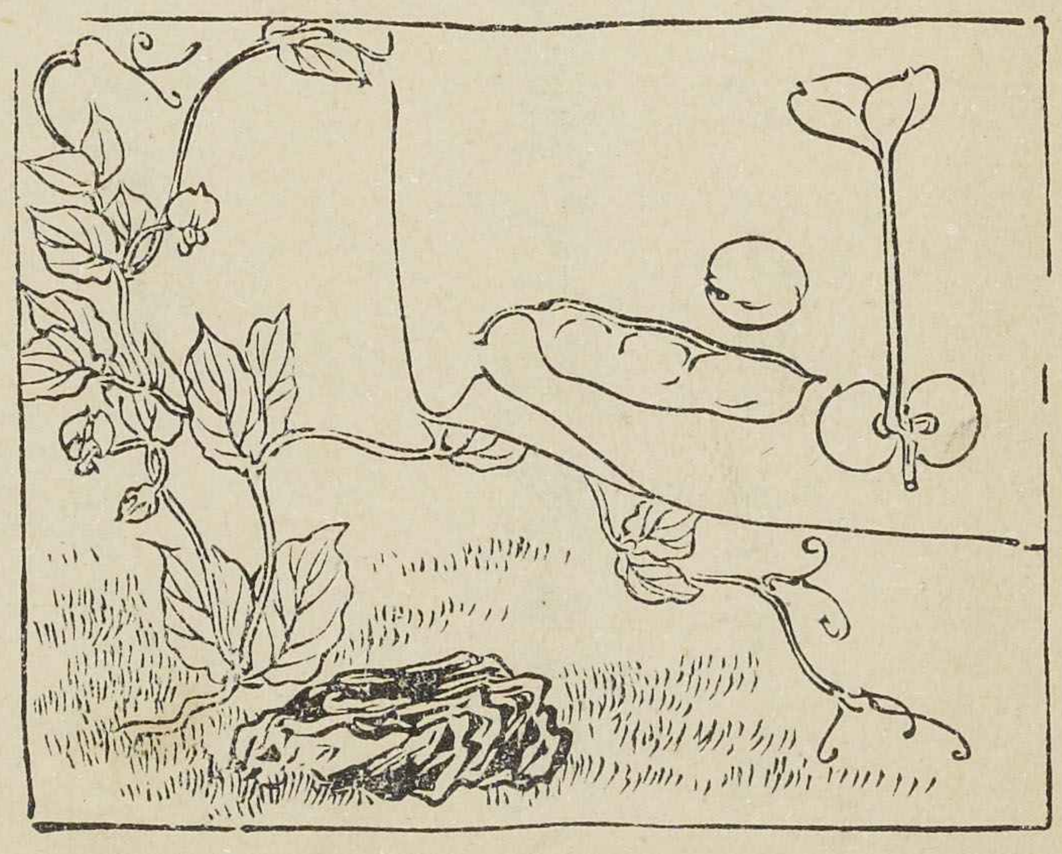
のかい。まにぼくがそだつから、見てゐたまへ。根は『しめりをとらう。』と思って、土にはいるよ。葉や莖（くき）は『空氣をとらう。』と思って、上にのびるよ。しりしよう。』と思って、上にのびるよ。しめり、空氣、日の光はぼくのたべものさ。ぼくは、しめり、空氣、日の光をたべて、だんだん、だんだん、まんぞくな植物になるよ。根はひろがる。莖（くき）からは、枝が出て、花がさく。おしまひには、今のぼくのよーなみがはいってゐる莢（さや）がなる。

あー。早く、その時が来ればよいなー」。

といった。

そこで、石はふしぎに思って、

「君は、じつに、ふしぎなことをいふねー。ぼくは、もう、何十年も、ここに、みるよ。しかし、ぼくは、ちっとも、そだったことはない。また、ぼくには、根もない。莖（くき）もない。あるのかも知らんが、土にもはいらんし、上にも、のび



ん。君。それはうそではないか。」

といった。

こんな話をしてゐるうちに、豆は、まんなかから、二つに、われた。根が出た。芽が出た。芽は、のびて、莖となった。そして、だんだんと、豆がいったほりになった。

石は、はじめて、そだつといふことを知った。また、「じぶんはそだつものでない。」ということをも知った。

第十三　鳥ノ巣（ス）。

アル所ニ、多クノ木ニテトリマカレタル小サキ村アリケリ。ソノ木ノ中ニハ、春、キレイナル花ノサクモアリ、秋、味ヨキミノナルモアリ。マタ、アル木ニハ、美シキ多クノ鳥、巣（ス）ヲカケテ、サモ、タノシゲニ、ナキケリ。

コノ村ノ人ハ、ツネニ、子ドモラニ、

「オマヘタチハ、鳥ヲイヂメテハナリマセン。イヂメタリ、巣（ス）ヲ取ッテモナリマセン。イヂメタリ取ッタリ

庭

スルト、春ニナッテモ、花ガサキマセン。秋ニナッテモ、ミガナリマセン」。

トイヒキカセタリ。

シカルニ、一人ノ、アシキ子ドモアリテ、木ニ、ノボリテ、コトゴトク、ソノ巣(ス)ヲトリタリ。鳥ハ、大イニ、オソレテ、ミナ、ウチツレテ、ニゲサレリ。コレヨリ、庭ニモ、野ニモ、鳥ナカズシテ、村ハ、ハナハダ、サビシキ所トナレリ。

ソレノミナラズ。鳥ノニゲサリタルヨリ、木ニ、

枯　乘

毛虫、シダイニ、フエキテ、芽ヲ食ヒ、葉ヲ食ヒ、ツヒニハ、枯木ノゴトクニ、ナセリ。

カノ、アシキ子ドモハ、「コノ秋ハ、ジューブンニ、ミヲ食ハン」。ト思ヒタリシガ、カカルアリサマニナリタレバ、ソレモ食フコトアタハザルニイタレリ。

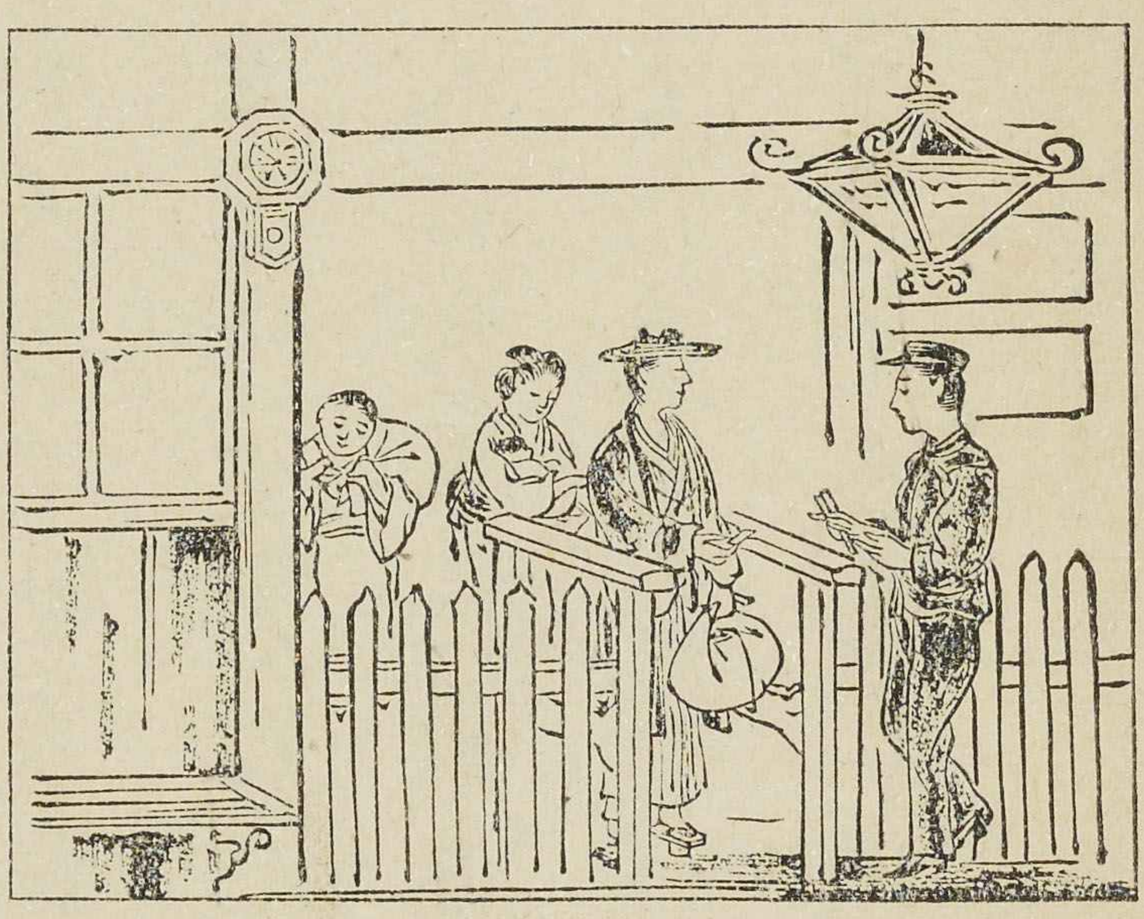
第十四　停車場。

人が、おほぜい、停車場の方へ、行きます。あれは八時の汽車に乗るのでせう。汽車は、きまった

時間が来ると、すぐ、出ます。一分でも、まつことはありません。

停車場の中では、人が切符を買つてゐます。後から、来た人は、さきに、来た人の後について、じゅんに、買つてゐます。また、荷物をあづけてゐる人もあります。あれは、えんぽーへ、行く人でせう。

驛夫がべるをならしました。人が、切符をきつてもらつて、乘場に出ました。まもなく、汽車が見え



客車（きゃくしゃ）の後についてきました。まっさきに、煙をはいて、來るのは機關車（きかんしゃ）です。機關車（かんしゃ）は、蒸氣（じょーき）の力で、後の車をひくものです。機關車（きかんしゃ）の次に、たくさん、ついてゐるのは客車（きゃくしゃ）です。客車は人を乘せてゐるものです。貨車（かしゃ）は荷物を乘せるものです。

汽車が着きました。客車（きゃくしゃ）から、人がおります。お

りてから、ほかの人が乗ります。わかとしよりや子どものせわをして、乗せた人のでせう。おろしてから、ほかの荷物をのせます。あれは、さきに、あづけた人のでせう。

人は客車に乗りました。駅夫は荷物をのせました。まもなく、八時になりました。駅長があひずをしました。汽笛が、ぴーと、なって、汽車が出て行きました。

旅行をする人。　みおくりする人。
今、着く人をまつ人。　むかへに、出た人。
べんとー賣るのは　はっぴを着た人。
手荷物かついで、　運ぶは赤帽（あかぼー）。
がらんがらんと、べるがなる。
煙をはいて、汽車が來る。」
驛（えき）の名呼ぶ聲。
おりくる人人。　乘りこむ人人。
あひたるよろこび。　わかるるかなしみ。

あいさつさま、　ことばも短く。

やがて、汽車さり、人ちりて、

あとを、驛夫が、掃除する」。

第十五　貿易。

世界ノ中ニハ、多クノ國アリテ、海ニソヘル國モアレバ、山ニカコマレタル國モアリ。マタ、暖ニシテ、年中、草木ノシゲレル國モアリ、寒クシテ、雪ノキユル時ナキ國モアリ。

サレバ、コレラノ國ヨリ出ヅル産物モ、マタ、同

産

有無

ジカラズ。ワガ國ノゴトク、米、生(キ)糸(イト)、茶ヲ産スル國モアリ、イギリスノゴトク、鐵、石炭ヲ産スル國モアリ。ソノホカ、海ノ産物アリテ、山ノ産物ナキ國モアリ。マタ、暖キ土地ニハ、暖キ土地ノ産物アリ、寒キ土地ニハ、寒キ土地ノ産物アリ」。サレバ、オノオノ、ソノ産物ヲ賣買シテ、タガヒニ、有ルモノト、無キモノトヲトリカフルコトハ、ハナハダ、必要(ヒツヨー)ナルコトナリ。カク、國ト國トノ間ニ、賣買スルヲ貿易(ボーエキ)トイフ。

貿易盛ナレバ、ソノ國富ミ、貿易オトロフレバ、ソノ國貧シ。サレバ、國民タルモノハ、オノ家業ヲハゲミテ、多ク貿易ヲ盛ナラシメンコトヲツトムベシ。

第十六　開港場。

開港場トハ貿易ヲナス港ニシテ、内國ノ産物ヲ輸出シ、外國ノ産物ヲ輸入スル所ナリ。ワガ國ニハ、開港場、四十アマリ、アリ。ソノウチ、オモナルモノハ横濱、神戸、大坂、長崎、函館ナドナリ」。

店

深

船

横濱（ヨコハマ）ハ、東京（トーキョー）ノ西南、八里バカリノ所ニ、アリ。開（カイ）港（コー）ノハジメマデハ、サビシキ、リョーシノ村ナリシガ、今ハ、大イナル商店タチナラビテ、貿易（ボーエキ）、モットモ、盛ナリ。

神戸（カウベ）ハ、大坂（オホサカ）ノ西、十里バカリノ所ニ、アリ。港ノ内、水深クシテ、大イナル船（フネ）ヲトムルニ、便利ナレバ、船ノ出入、ハナハダ、多シ。

大坂（オホサカ）ノコトハ、スデニ、ノベタリ。サレバ、ココニハ、ノベズ。

長崎（ナガサキ）ハ、九州（キューシュー）ノ西北部ニ、アリ。昔ヨリ、貿易（ボーエキ）ヲナセル所ニシテ、船ノ出入、今、ナホ、ハナハダ、多シ」。

函館（ハコダテ）ハ、北海道（ホッカイドー）ノ西南部ニ、アリ。北海道（ホッカイドー）ノ産物、多クハ、コヽニ、アツマリ、市中、大イニ、ニギハヘリ。

コノホカ、下關（シモノセキ）ト門司（モジ）トモ、マタ、名高キ開港場（カイコーバ）ニシテ、トモニ、瀬戸内海（セトナイカイ）ノ西ノ入口ニ、アリ。ソノウチ、下關（シモノセキ）ハ、明治二十七八年戰役（センエキ）ノトキ、清（シン）國ノ使ト、ワガ國ノ大臣（ダイジン）トガ媾和（コーワ）ノ談判（ダンパン）ヲ開

キシ所ナレバ、ソノ名、コトニ、高シ。

第十七　神戸からの電報。

洋吉の家は、横濱に、ある。父は日本丸といふ汽船の船長で、先月、支那へむかって、たって行った。洋吉は、「もう、お歸りになるであらう」と、まいにち、まいにち、待ってゐた。母も待ってゐた。ある日、げんかんで、「電報」といふ聲がした。洋吉は、すぐ、出て行って、電報を受け取った。見ると、おもてには、「ヨコハマ、、、、、ハルノヨーキチ」と、書

封持

いてあって、うらには、「ミチスケ」と、書いてあった。

洋吉(よーきち)は喜んで、

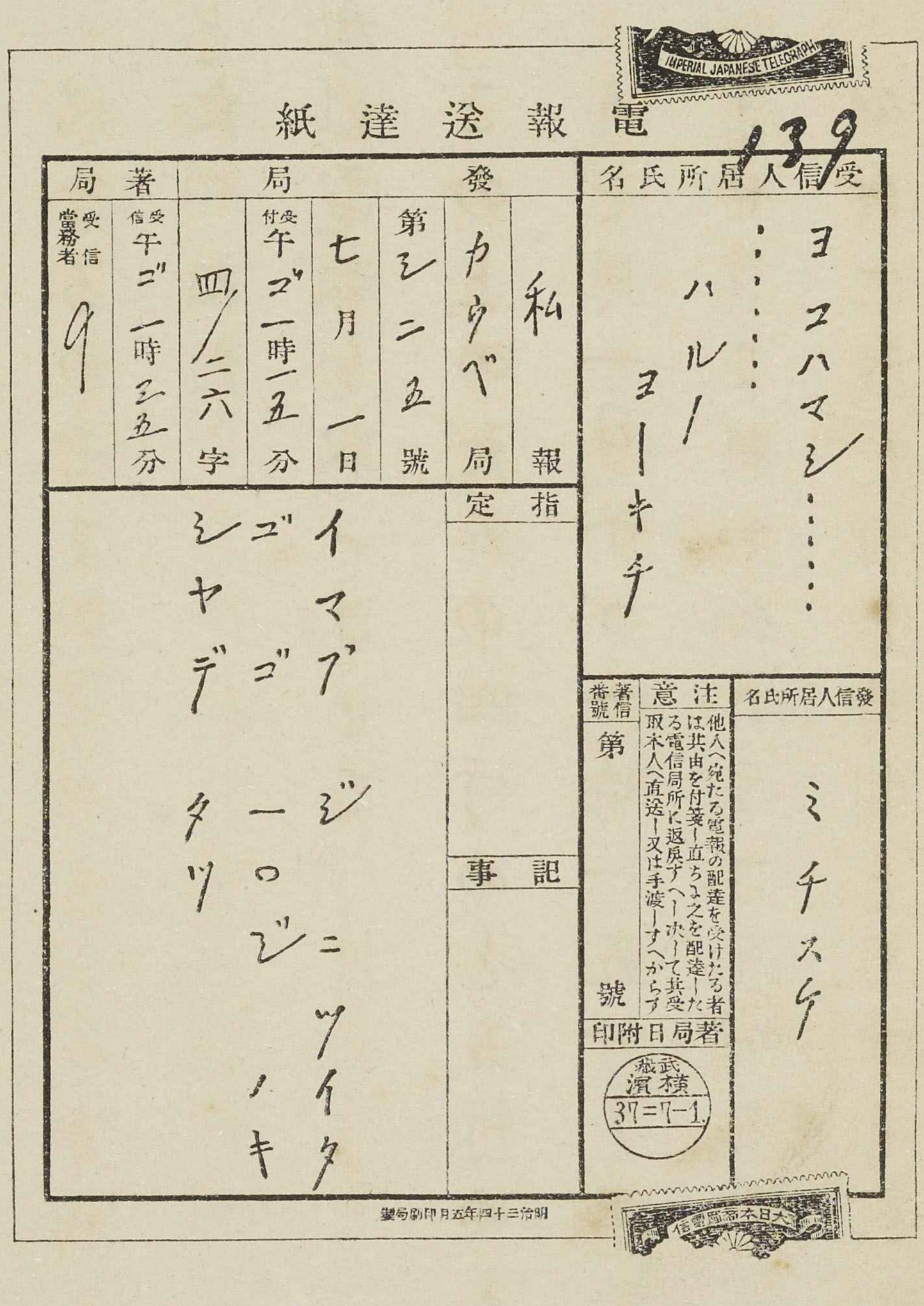
「おかあさん。おとうさんから、電報(でんぽー)が来ました。」

といって、母のところへ、持って行った。

母も喜んで、受け取って、すぐ、封をあけた。中には、次のよーに、書いてあった。

母は、たいそー、喜んで、

「洋吉(よーきち)。これをごらん。おとうさんは、いよいよ、



あした、お歸りになりますよ。」といった。しかし、洋吉（よーきち）は、よく、わからなかったので、『イマブジニツイタ』と、あるのは、いつ、どこに、

お着きなされたのですか。また、午後十時の汽車で、おたちになると、いつ、うちにお帰りになるのですか」。

とたづねた。

母は、電報を取って見せて、

「この上のだんの四行めと五行めとをごらん。『七月一日』『午ゴ一時一五分』と、書いてあります。おとうさんがこの電報をおかけになった日と時間とです。それから、この

教

二行(ぎょー)をごらん。『カウベ』と書いてありませう。ここが、おとうさんがこの電報(でんぽー)をおかけになった所です。それですから、おとうさんは、けふ、一時ごろに、神戸(かうべ)にお着きになったのでせう」。

と教へた。そして、机の上から、汽車の時間表(じかんひょー)を持って来て、あけて見て、

「おとうさんが神戸(かうべ)を、午後十時に、おたちになると、十一時ごろには、大坂(おほさか)、十二時ごろに

は、京都、あしたの午前五時三十分ごろには、名古屋、十二時ごろには、静岡にお着きになりますそして、はま、横濱には、午後六時ごろに、お帰りになるのです」。

と教へた。

洋吉は、これを聞いて、

「それでは、いよいよ、あしたの六時ごろに、お帰りになりますね」。

といって、たいそう、喜んだ。そして、電報は、早く、

つくもので、文は短くても、よく、わかることと、汽車の時間がきまってゐて、たいそー、つごーのよいものであることに、おどろいた。

第十八　航海（こーかい）の話。　（一）

洋吉（よーきち）の父は、七月二日の午後六時ごろ、歸って來た。洋吉（よーきち）は、たいそー、喜んだ。母も喜んだ。やがて、あいさつもすみ、ごはんもすんで、ばんには、父が、いろいろ、おもしろい話をした。

父は、次の日、町はづれの小學校に、行った。先生は、

願

たいそー、喜んで、「生徒に、何か、お話をしてやってください。」と願った。父は「それでは。」と次のよーな話をしてやった。

「みなさん。私は子どもの時に、この學校へ、通ってゐました。みなさんと同じよーに、あそこの庭で、まりをなげたり、ここのこーどーで、修身のお話を聞いたりしてゐました。それで、私は、この學校が、たいそー、なつかしうございます。みなさんもなつかしうございま

す。

なつかしいので、けふ、來てみました。ところが、『みなさんに、何か、お話をしてあげてくれ』といふ先生のおたのみがございましたので、つだん、おもしろいお話もありませんが、私は日本丸（にっぽんまる）といふ汽船の船長をしてゐますから、ひとつ、航海（こうかい）のお話をいたしませう。

みなさんは、海（かい）を知つてゐらっしゃる。汽船も、軍艦（ぐんかん）も知つてゐらっしゃる。航海（こうかい）といふのは、その

汽船や軍艦などに乗って、その海をわたって行くことです。そして、この航海のうちには、いろいろ、おもしろいことがあります。

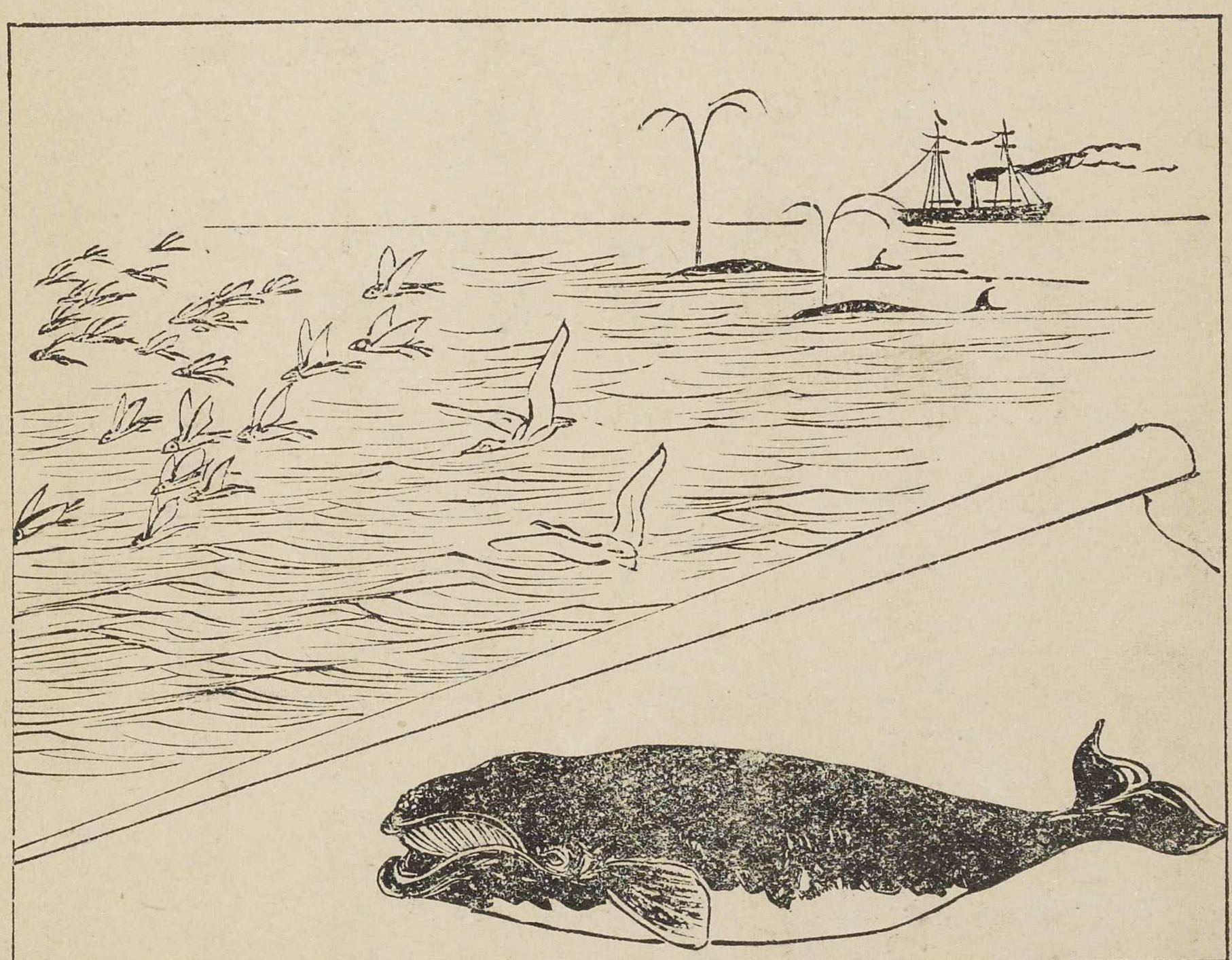
まづ、いかりをまいて、港を出て行くと、帆掛船のはしってゐるのが見える。白い鳥が、あっちこっちで、とんでゐるのが見える。海ばたには、松のならんでゐるのが見える。

それから、だんだん、沖の方へ、進んで行くと、もう、目に見えるものは水ばかりで、その水

ばかりの中を、船が、どんどんと、波をきって行くのです。日の出、日の入には、光が波にうつって、海が、まるで、金のよーになる。月夜には、銀のよーになる。その美しいことといったら、何ともいひよーがありません。

また、鯨（くぢら）といふ大きな魚の形をしてゐるけもの、十何間もある、大きなけものが、頭から、高く、すいきをふいてゐることがあります。とびの魚といふ魚が、雲のよーに、むらがっ

て、とんでゐることもあります。あほー鳥といふ大きな鳥がそれをおってゐることもあります。それから、いよいよ、外國の港に着くと、めづらしい家がたっ



降

てゐる。めづらしい草木がはえてゐる。かはったふーをして、かはったことばをつかふ人がゐる。いや、もう、航海ほどおもしろいものは、またと、ありません。」

第十九　航海の話。（二）

洋吉の父は、こっぷの水を飲んで、話をつづけた。

「しかし、航海する間には、大風のふくことがある。霧がかかったり、大雨、大雪が降ったりして、一寸さきも見えないよーになることもあ

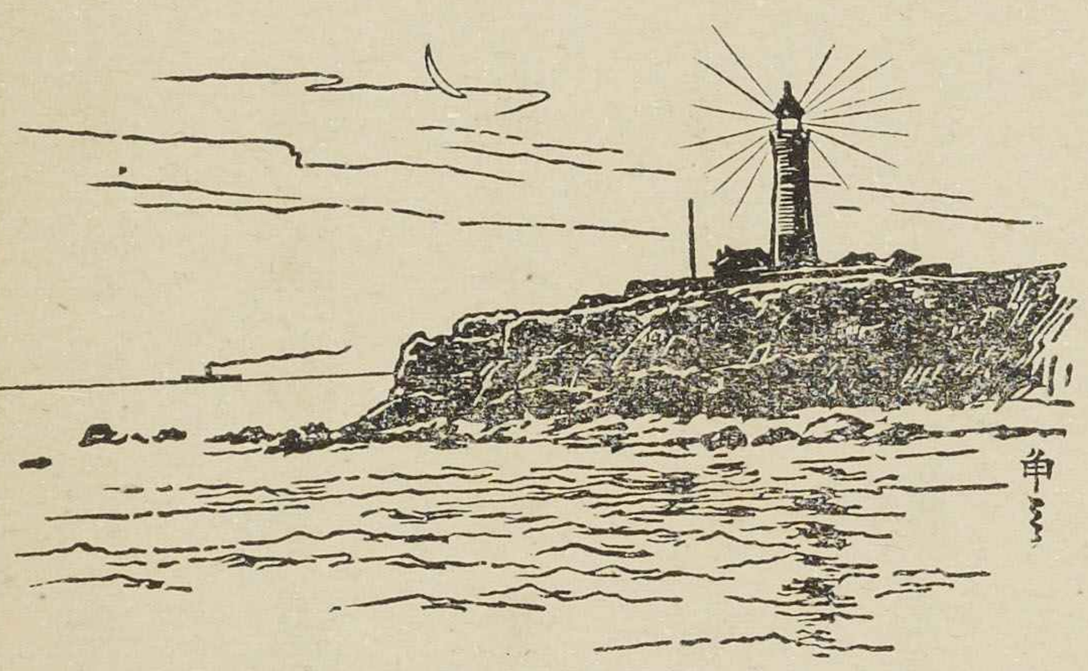
る。

大風がふくと、山のよーな波がよせて來て、『船は、今にも、沈むか。』と思はれるまけれども、船は、なかなか、沈まない。どんどんと、この山のよーな波をきって行くに。それですから、どきょーをすゑてさへをれば、よいのです。なにもおそろしいことはありません。ただ、おそろしいのは霧がかかったり、大雨大雪などが降って、一寸さきも見えないよーに

暗い星

なることです。

これが、夜の暗いので、さきが見えないのを見ても、船が、どこに、をるか、わからしいことはありません。星ら、なにも、おそろしいことはありません。星



燈臺だ。』といふものがあって、その光るよーすなどで、『あれはどこの燈臺だ。』といふこともわかりま す。

けれども、霧がかかったり、大雨、大

雪などが降ったりして、さきが見えないよーになると、晝は、もとより、夜でも、星も、燈臺も見えないよーになります。そして、浅瀬にのりあげたり、あんしょーやほかの船にぶつかったりするよーな、あぶないことがあるから、おそろしいのです。

しかし、そんなときには、浅瀬にのりあげたり、あんしょーにぶつかったりしないために、船をとめてしまひます。そして、ほかの船にも

ぶつからないために、汽笛や鐘をならして、霧のはれるのを待ちます。さうするとなにも、あぶないことはありません。ですから、おそろしいといっても、まー、安心です。

さて、おしまひに、ひとつ、いっておくことがあります。それは、『日本は海國でありながら、人が、わりあひに、海をおそれる』ということです。ちょっと、渡舟に乗ってごらんなさい、『こは

いよ。こはいよ。』といって、泣くものがあるではありませんか。こんなことでは、しかたがありますまい。

みなさんの中には、大きくなって、航海をする人もありませう。貿易をする人もありませう。漁業をする人もありませう。かごとをする人はいふまでもないことです が、たとひ、農業をする人でも、工業をする人でも、小さいときから、海になれておくとい

ふことは、よほど、必要（ひつよう）なことだと思ひます。」

第二十　燈臺（とーだい）。

空に、月なく、星さへなくて、
一寸さきすら見えざる夜に、
沖の汽船や軍艦（ぐんかん）などは、
なにをめあてに、航路（こーろ）をきむる。
岸に、岬（みさき）燈臺（とーだい）ありて、
遠く、沖まで、光りてあれば、
沖の汽船や、軍艦（ぐんかん）などは、

それをめあてに、航路をきむる。

きめし航路を進みて行けば、

淺瀬暗礁、數ある海も、

さはることなく、渡るをうべし。

あー。燈臺の貴きことよ。

第二十一　琉球。

琉球ハ九州ノ西南ニツラナレル、五十アマリノ島島ヨリナレリ。ソノウチ、沖繩島、モット大

沖繩(オキナハ)島(ジマ)ニハ、二ツノ、オモナル都會(トカイ)アリ。ソノ一ツヲ首里(シュリ)トイヒテ、昔、琉球(リューキュー)ノ島主(トーシュ)ノ居リシ所ナリ。他ノ一ツヲ那覇(ナハ)トイヒテ、今、沖繩(オキナハ)縣廳(ケンチョー)ノアル所ナリ。

氣候ハ、ハナハダ、暖ニシテ、冬、スラ、雪ノ降ルコトナク、草木、ツネロニハ、スデニ、櫻ノ花サキ、農夫苗ヲ植ユルハジム。サレバ、人人、年中、ヒトヘモノヲ用ヒテ、綿入ナドヲ用フルコトナシ。

琉球（リューキュー）ニハ、水少ケレバ、米ヲ産スルコト少シ。サレド、サツマイモ、一年ニ、二度、取入ツネニ、食フモノハ、タイテイ、コレナリ。マタ、砂糖（サトー）、カスリ、ヰムシ、ロ、豚（ブタ）ナドヲモ産ス。

第二十二　寒暖計（カンダンケイ）

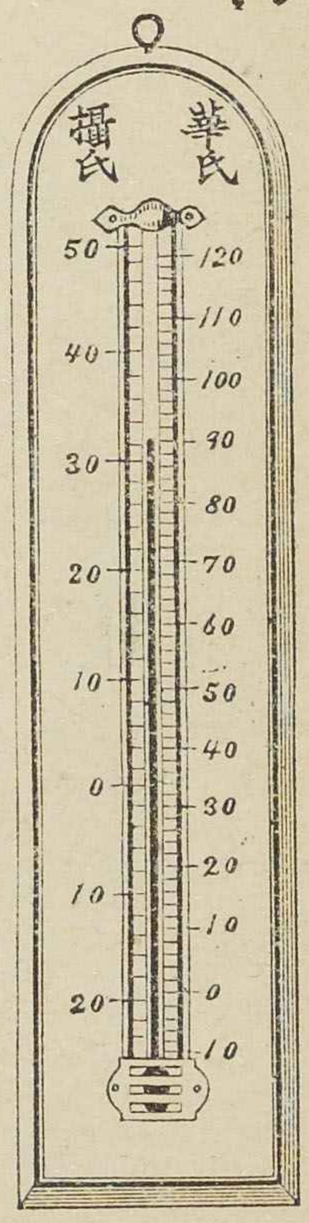
寒暖計ハ氣候ノ暑イ寒イヲ計ル器械（キカイ）デ、ガラスノクダニ水銀（スイギン）カ、色ヲツケタアルコールカヲ入レテ、コレニ、度ガモッテアルモノデアリマス。

冷

作

タイテイ、物ハ、ドンナ物デモ、アタタマルト、カサガフエ、冷エルト、カサガヘルモノデアリマス。

水銀（スイギン）モ、アルコールモ、ガラスモ、ミンナ、サウデアリマス。シカシ、フエルトヘルトノドアヒハ、物ニヨッテ、チガッテヰテ、水銀（スイギン）ヤアルコールナドハ、ガラスヨリハ、ソノドアヒガ、ズット、多ウゴザイマス。



ソレデ、前ニイッタヨーニ、作ッテオキマスト、水銀（スイギン）

ヤアルコールハ、氣候ノ暑イ寒イ
タリ、サガッタリシマス。コノアガッタ
リシタノヲ、度ニアハセテ、見ルト、
暑イカ、ドノクラヰ、寒イカガワカル
寒暖計（カンダンケイ）ノ度ノモリヨート攝氏（セッシ）ニハ、華氏（カシ）ト
氏（シ）トノ三トホリアリマス。私ドモ
カッテヰルノハ、華氏（カシ）デアリマス。

だいぶん、すずしくなりました。
どなたさまも、おかはりはござ

伺

いませんか。お伺ひ申します。わ
たくしのうちでは、みんな、たっ
しゃで、をりますから、御安心くだ
さいませ。父からきき、きますれば、
おとなりの町では、わるい病氣が
はやってをるとかいふことですが、
さぞ、御しんぱいでございませ
う。どうぞ、御用心なさいませ。

うめ

十月三日

おしげ様

お手紙をいただきまして、ありがたうございます。どなたも、御きげんよくいらっしゃいますさうで、まことに、けっこーにぞんじます。私の方でも、みんな、かはりがありませんから、どうぞ、御安心下さいませ。となりの町のはやりやまひは、いちじは、ずいぶん、

ひどくて、しんぱいいたしましたが、このごろは、だんだん、おとろへてまゐりました。しかし、仰のとほり、じゅーぶん、用心するつもりでございます。

十月四日　　しげ

おうめ様

○おかはりはございませんか。お伺ひ申します。御かはりござなく候や。御伺ひ申上候。

度存　晴　算術　石、斗、升、合

○みんな、たっしゃでをりますから、御安心くださいませ。
○ありがたうございます。
ありがたく存候。

第二十三　小太郎の日記。

十月八日、木曜日、晴。

けふ、學校で、算術の時間に、米や油などをはかる、石、斗、升、合などといふ枡目のつかたと、そのけいさんのしかたとをならった。學校がひけてから、おとうさんと、となりの町

曇

の油屋に、行って、石油をあつらへた。油屋は「あしたのひるすぎに、持たせてあげます。」といった。油屋からの歸に、鉛筆と手帳とを買ってもらった。

十月九日、金曜日、曇。

午後三時ごろ、となりの町の油屋から、きのふ、あつらへた石油を持って來た。それに、次のよーな送り狀がそへてあった。

記

一石油壹かん

代金壹圓八拾錢也

注文者殿

右御注文の品御とどけ申上候間御受取下され度候也

代金はこの者に御渡し下され度候

明治三十七年十月九日

齋藤兵右衛門殿

田中油商店

ぼくはその送り状(じょう)を、おとうさんの所へ、持って行った。おとうさんは、すぐに、銭をはらっておやりなされた。使は次のよーな受取をおいていった。

分

正

證

一金壹圓八拾錢也

右正に受取候也

明治三十七年
十月九日

石油壹かん代

齋藤兵右衞門殿

田中油商店

證

十月十日、土曜日、晴。

けふ、學校で、身體檢査があった。ぼくのせいの高さは四尺一寸二分あって、目方は六貫八百匁あった。

學校からの歸に、人が稻をかってゐるのを見た。
歸ってから、おとうさんにお話したら、「うちでも、
あしたから、かりはじめるつもりだ。」とおっしゃっ
た。ぼくも、あしたは日曜日だから、ぼくのできる
ことだけは、おてつだひするつもりだ。

をはり。

国立国語研究所
1000605020
72426

明治三十八年十月卅一日
文部省檢查濟

明治三十六年九月廿二日印刷
明治三十六年九月廿五日發行
明治三十八年十月廿一日翻刻印刷
明治三十八年十一月十五日翻刻發行

著作權所有

尋常小學讀本 七
定價金八錢

著作兼發行者 文部省
翻刻發行者 大橋新太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 愛敬利世 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百。八番地
發行所 博文館 東京市日本橋區本町三丁目八番地
發賣所 合名會社國定教科書共同販賣所 東京市日本橋區新右衞門町十六番地

. 0
24